

## 研究ノート

# 東アジア史のなかのブリヤート人

木村 英亮

はじめに

1. ロシアによるブリヤート人征服
2. ソヴェト政権の樹立
3. モンゴル人民革命とブリヤート人
4. セミョーノフと日本軍の干渉
5. 定住化・工業化と経済的変革
6. ブリヤート人領域縮小と大粛清
7. ロシアのなかのブリヤート人
8. 言語と文字：ロシア化とモンゴル化

キーワード：ブリヤート人、ブリヤート人、  
ロシア、モンゴル人

はじめに

東西シベリアと極東地方、すなわち広義のシベリアは1276.6万km<sup>2</sup>、旧ソ連の面積の57.0%、ロシアの74.8%を占める。しかし人口は1989年3209.9万人でロシアの21.8%を占めるにすぎない。その大部分はロシア人で、原住諸民族は161.8万人、5%である。おもな少数民族は、ブリヤート人とヤクート人で、表1に示したようにブリヤート人41.7万人、サハ人38万人である。原住諸民族の比率は、1926年にすでに6%にすぎなかった。さかのぼると、1700年50%、1790年32%、1897年14%、1911年11%と急減しており、ソヴェト時代には安定していたといえる。

表1 シベリアの諸民族，1926-1989（千人）

	1926	1959	1970	1979	1989
ブリヤート(人)	237	252	313	350	417
サハ	241	236	295	327	380
アルタイ	39	45	55	59	69
ハカス	53	56	65	69	78
トヴァ	60	100	139	165	205
シヨル	17	15	17	16	17

Fondahl, p. 192

ロシアが東シベリアに進出したとき出会ったもっとも大きい民族集団はブリヤート人であった。すなわち、ロシアのシベリア支配にとってブリヤート人の存在は大きかった。それはソ連解体後のロシアにとっても同じであろう。

ブリヤート人をふくむ広義のモンゴル人は、モンゴル国の他、ロシアのブリヤート人、中国の内モンゴル自治区と、図1、2に示したように3国にまたがって分布している。近現代史において、モンゴル人の統一運動は、大陸進出の足がかりをえようしていた日本によって注目された。まずロシア革命期には、この地域に、モンゴル民族主義によって反ソ政権をつくらうとした。東欧では第一次世界大戦後戦勝国は諸帝国の解体と小国の「独立」をもたらしたが、ここでは日本はモンゴル民族の「統合」によって目的を達成しようとしたのである。日中戦争・

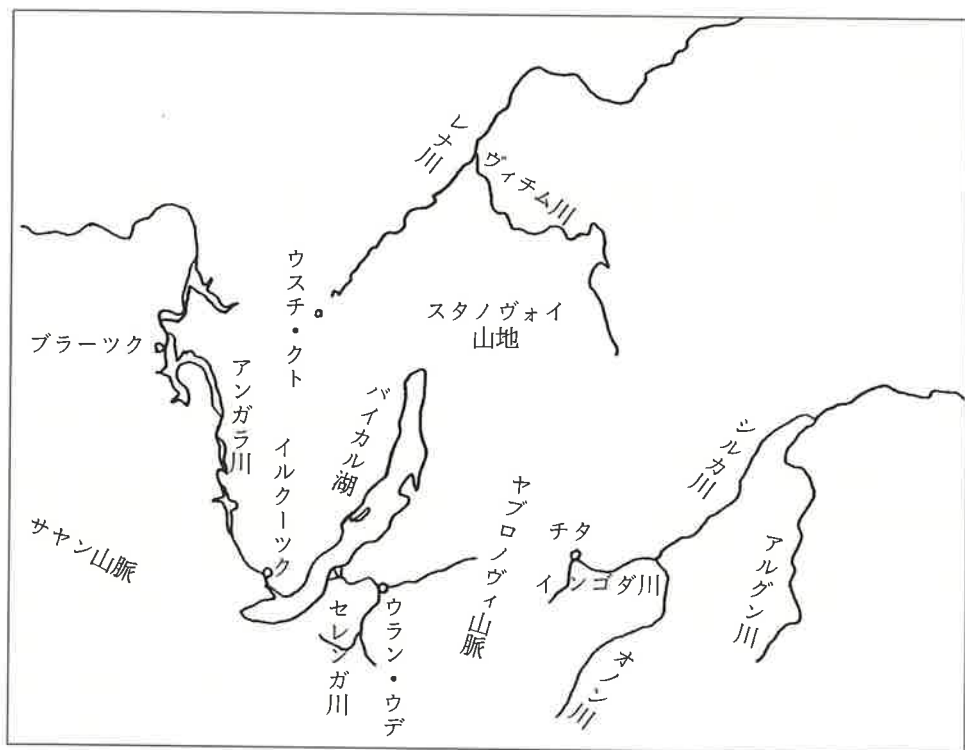


図1

太平洋戦争期においても、モンゴル民族主義を利用しようとした。

現在、ロシアのブリヤート人は、全体として人口密度が低く、しかもそのなかでブリヤート人はロシア人に比べ相対的に少ない。モンゴル国は人口密度は低い、ロシア人、中国人は少なく、モンゴル人がおもである。中国には内モンゴル自治区を中心にモンゴル国の2倍以上住むが、漢人が圧倒的である。

日本の旧ソ連にたいする関心は、トルコ系ムスリムである中央アジア諸民族に向いているが、中国、モンゴル、ロシアにまたがり、日本に近く分布するモンゴル諸民族の動向も重要である。

本稿は、このような問題関心からブリヤート人についての歴史的な概念をえようとした今後の研究のためのノートである。

ここにおいては、ロシア人との関係、モンゴ

ル人のなかにおける位置に注目した。

ブリヤート人、すなわちブリヤート共和国は、35.13万km<sup>2</sup>、人口105.25万人（1996年）であるが、ブリヤート人の民族的組織としては他に、ウスチ・オルダ・ブリヤート自治管区2.24万km<sup>2</sup>、人口14.28万人、アギン・ブリヤート自治管区1.90万km<sup>2</sup>、7.9万人がある。なお、ロシア内のモンゴル系民族としては、カルムイク人があり、1989年16万5821人である。

ここで、ブリヤート人の地理について、事典的にふれておきたい。

〔自然地理〕 ブリヤート共和国は図2に示したように、バイカル湖東岸南岸、山岳地にあり、バイカル湖畔で標高455mである。西北はイルクーツク州で、3000m級の東サヤン山脈、2000m級のスタノヴォイ山脈が境界をなしている。東はヴィチム川を境界としてチタ



図2

表2 モンゴル民族の分布

		ブリヤート人
ロシア	1億4702万1869 (人)	42万1000 (1989)
ブリヤート共和国	103万8252	24万9525 (24.03%), ロシア人69.94%
ウスチ・オルダ・ブリヤート自治管区	13万5870	4万9298 (36.28%), ロシア人56.54%
アギン・ブリヤート自治管区	7万7188	4万2362 (54.88%), ロシア人40.77%
なお、モンゴル系民族としては、カルムイク人が16万5821人 (1989)、カスピ海北岸に共和国をもつ。		
モンゴル国	232万 (1993)	中モンゴル人が95%, うちブリヤート人7万人
中国	11億7171万 (1992)	モンゴル人480万2407 (1990)
内モンゴル自治区	2145万6800 (1990)	モンゴル人337万5200 (15.7%)

州があり、南は1000-3000m級の山岳地帯を境界としてチタ州、モンゴルがある。西はトポグラホッフ山を境界としてトゥイヴァ共和国と接する。首都ウラン・ウデからモンゴル国境にかけてステップ地帯が広がり、セレンガ川がバイカル湖に注ぐ。全土の60%は森林(タイガ)である。大陸性気候で、1月の平均気温は-18.9度、7月16.7度、年間降水量300mmである。

[民族構成] ブリヤート共和国の民族構成は表2に示す通りであるが、ブリヤート人の比率は共和国外の2自治管区の方が高い。

[経済] おもな工業としてヘリコプター製造、機関車・車輛修理、オートメーション器具・設備、畜産用機械設備、木材加工と製紙、セメントなど建築資材、毛織物、食肉、水産物加工などの工場がある。褐炭、黒鉛、タングステン、モリブデン、などの採掘、発電もおこなわれる。酪農、羊の飼育、養豚、養鶏もおこなわれ、小麦、カラスムギ、大麦が栽培される。300以上の鉱泉がある。独立後の工業生産は1995年52%にまで落ち込んでいるが、これはロシア全体値に近い。最低生活費が高く、貧困層が5割を超える。

ウスチ・オルダ・ブリヤート自治管区・鉱業(炭鉱-ハラヌト露天掘り鉱、石膏)、林業(木材調達企業『バイトグスコエ』)、木材加工業、食料品製造業(食用油、チーズ製造)がある。農業は、牛乳・食肉と羊毛に専門化し、羊、豚、馬の飼育もおこなわれる。穀物は主として小麦。

アギン・ブリヤート自治管区・鉱業(オルロフ選鉱コンビナート-タングステン酸塩鉱と精鉱)、林業(木工用材、用材、家具、木工品-ドリドルギン林業)、食料品、建設用材、細毛飼羊、乳牛・馬の飼育、養豚、養鶏。

穀物・牧草の栽培。

[ウラン・ウデ] ハマル・ダバン山脈とウラン・ブルガス山脈の間のセレンガ川右岸の盆地、バイカル湖の東75kmにある。町の南部はセレンガ川の支流ウダ川を越えて広がる。1月の平均気温は-24度C、7月は17度Cである。降水量は年300mmである。シベリア横断鉄道の重要な結節点で、ここからモンゴルに向かう線が分岐している。幹線道路もイルクーツク-ウラン・ウデがある。セレンガ川の船着き場、空港もある。

人口は、1926年2.8万人、39年12.57万人、59年17.4万人、70年25.4万人、79年30万人、92年36.6万人である。

1666年ウダ川岸にコサックがエヴェンキ人とブリヤート人からヤサクを集めるための冬越地ウディンスコエとして基礎をおき、1689年ヴェルフネウディンスキー要塞を築き、1690年から西ザバイカリエの行政中心地とした。ヴェルフネウディンスクとは、ウダ川河口を意味し、現イルクーツク州アンガラ盆地のニジニェウディンスクと区別する。ニジニェウディンスクからヴェルフネウディンスクにくるためには、アンガラ川を廻り、バイカル湖を越え、セレンガ川を廻らねばならない。1775年には地方の、1783年要塞から都市に改造されイルクーツク総督管区の郡都となり、1822年にはイルクーツク県の郡都、1851年にはふたたびザバイカル州が形成された。ブリヤート人には、14人のデカプリストが流刑され、多くが数回にわたってヴェルフネウディンスクを通して移送された。セレンガ川の水運の便があり、トロイツェコサフスクとキャフタへの自動車道路をもっていて、ザバイカリエの大通商中心地となった。キャフタとヴェルフネウディンスクを通じて、中国と貿易が

行われ、茶、絹織物などが運ばれた。1899年、シベリア横断鉄道が開通し、以後の経済的発展をもたらした。19世紀末、ヤルマルカ（市場）が開かれ、機関庫の他、ビール醸造、石鹸製造、製材、ガラス製造工場、蒸気製粉所、発電所がつくられた。

1920年4月－10月極東共和国の首都となり、21－22年極東共和国のブリヤート自治州の中心地、23年からブリヤート・モンゴル自治共和国の、58－92年ブリヤート自治共和国の首都となった。1934年ヴェルフネウディンスクは、ウラン・ウデ（赤いウダ川）と改称された。

### 1. ロシアのブリヤート人征服

チンギス・ハンは現在の・ロシアのオノン川辺で生まれた。アムール川に合流するオノン川とアルゲン川流域は草原ステップである。バイカル湖に流入するセレンガ川流域、バイカル湖西側のアンガラ川流域からレナ川上流にも草原ステップが広がっている。この時代、森林の民に属するもののうちにブラガチン（貂の狩猟者）、ケレムチン（リスの狩猟者）などの種族があったとされるが、これはそれぞれブラガト、エリヒトの先祖であるとみられる。

チンギス・ハンは1206年、モンゴル諸部族を統一して、民族の1時代を区切った。

1368年に元が滅びた後のモンゴル人は、ステップに帰ったが、大きく、トゥイヴァの南、エニセイ川の源流付近のオイラートと、チンギス・ハンの首都であったカラコルム周辺のハルハとに分かれた。

ブリヤート人は、バイカル湖西側のアンガラ川流域からレナ川上流にひろがる草原ステップに住み、湖西のブリヤート人の一部は定住して

いた。

ブリヤート人の中では、16世紀後半にチベットから仏教が伝わるまでシャーマニズムが信じられていた。ブリヤート人は、シベリア先住民のなかでもっとも人口が多く、17世紀には少なくとも3万人いた。ロシア人がくる前、バイカル湖とエニセイ川の間ツングース、サモエドなどの部族は、ブリヤート人かチュルク系のキルギス人に支配されていた。

ロシア人は1625年に、ツングースからヤサクを徴収しようとして、ブリヤート人について聞き、その征服のために一連の要塞を建設し、1652年にイルクーツクをつくった。ロシア人に支配される前、ブリヤート人は、ブラガト、エリヒト、ホンゴドル、ホリント、タブナトの5部族があったが、ロシア帝国の支配の下で経済的結びつきが強まり、部族の違いがしだいになくなり、方言はいくつかのグループにまとまってブリヤート人形成が完了した。この年にはまた、ウダ、イヤ、オカ地域のブリヤート人の支配権を獲得した。1658年には、バラガンスク・ステップでブリヤート人の蜂起があった。多くのブリヤート人がロシア人の支配を逃れてモンゴルに集団移住した。

1550年モンゴル人のアルタン・ハンは中国に侵入し、都を建設し、ラマ教をとり入れた。アルタン・ハン王朝の力が弱まると、ジュンガルのオイラートの勢力が強まり、その下でトムスクを経由するロシア人とモンゴル人の大規模な交易が始まった。内モンゴルは1634－35年に、現在のモンゴル国の領域（外モンゴル）は約60年遅く1691年に、それぞれ清朝の支配下にはいった。ジュンガリアのオイラートは、1757年に清国に併合された。1689年のネルチンスク条約によってロシアと清国の国境が確定されるとともに両国の通商が始まった。1727年のキャフタ条

約では、サヤン山脈の南、エニセイ川上流全体が中国の外モンゴルの一部とされた。この条約の結果、ロシア領内に入っていたハルハ・モンゴル人はここに吸収され、ブリヤートの一部がモンゴルに取り残された。

シベリアの人口が1709年43万人から増大するにしたがってモンゴルの家畜や畜産品がキャフタを通じて輸出されるようになった。1760年、ロシアのアジア貿易の67%がキャフタ経由であった。アヘン戦争後は清国にとって内陸貿易の重要性はうすれたが、他方ではモンゴルも西欧の市場となり、中国人商人・高利貸を仲介者として食糧雑貨、小間物、穀物製品、織物が流入し、牛、羊毛、小麦その他が買いつけられるようになった。このなかでブリヤート人は18世紀後半から19世紀前半、ヤサクを払い始め、家内工業がおこり、モンゴルや中国との通商が発展した。

1710年代までに、西シベリアの人口は24万7000人となったが、東シベリアにはわずか6万6000人で、1897年になっても東シベリアには、西シベリアのトボリスク、トムスクの2州の合計の3分の1以下の90万9000人しかいなかった。18世紀初頭の東シベリアの先住民族は10万6000人でロシア人よりずっと多かったが、ロシア人は、レナ川、アングラ川、セレンガ川、インゴダ川などの地域のブリヤート人を圧迫し、とくに1799年のインゴダ川両岸からの駆逐によって、チタ付近のブリヤート人を孤立させた。

## 2. ブリヤーチアにおけるソヴェト政権の樹立

19世紀後半、ブリヤーチアに資本主義がおこった。金の生産がおこなわれ、皮なめし、製粉、石鹼製造などの家内工業が盛んになり、1891-1905年に建設されたシベリア鉄道を通じてロシ

アの市場に結びつけられた。19世紀末、定住住宅をもたないブリヤート人は16%となった。また、1897年のブリヤート人の識字率は7.2%となった。

19世紀末から20世紀初めにかけて、ブリヤーチアのヴォロスチ改革によって行政や警察による抑圧が強まった。土地整理によって土地所有がブリヤート成人1人あたり15デシャチナに制限され、イルクーツクで53%、ザバイカリエで36%が植民ファンドとして奪われ、遊牧生活の基盤が失われた。ブリヤート人たちはこれに激しく抵抗し、1904年2月には戒厳令が敷かれた。

1911年、イルクーツク州には12万8000人、バイカル湖東部には20万4000人のブリヤート人がいたが、ロシア人が急激に増加したため、とくに湖西部ではブリヤート人は5分の1となり、ロシア化が進んだ。第一次世界大戦時には数千人のブリヤート人が戦時後方作業のために前線に動員された。これらの政策は民族運動を強めたが、とくに戦時後方作業に徴集された人々は、十月革命にさいしてソヴェト政権を積極的に支持した。民族運動は、大モンゴルを目指すグループと、ロシア内での自治を追求するグループとに分かれた。

二月革命期、ヴェルフネウディンスク、トロイツコサフスク、タルバガタイ、ムイソフスクに労兵ソヴェトが生まれた。農村には、ヴォロスチ、村、スタニチヌイ委員会がつくられた。ブリヤート住民の間にも民族行政単位アイマク、ホシュン、ソモンが生まれた。十月革命の準備と実行の時期には、ロシア共産党イルクーツク委員会の活動に、ブリヤート人ポリシェヴィキが参加した。

十月革命の直前10月16日(29日)、イルクーツクで第1回シベリア・ソヴェト大会が開かれ、シベリア・ソヴェト中央執行委員会(ツェント

ロシビリ)が形成されたが、ここにはブリヤート人も参加した。

1918年1月23日(2月5日)、ブリヤート人のヴェルフネウディンスク(のちのウラン・ウデ)に革命チタ・コサック第2連隊がはいり、同日にソヴェト政権が樹立された。ソヴェトは全土につくられ、運輸と工業企業の一部が国有化され、労働者統制や8時間労働が導入された。帝室領地・修道院領地は没収された。しかし、まもなく1918年夏、シベリアのソヴェト政権は倒され、ザバイカリエでは、セミョーノフ・干渉軍の政権が支配する。

### 3. ブリヤート人とモンゴル人民革命

ブリヤート人は、1911年末辛亥革命を機にロシアの支持の下にモンゴルが独立を宣言した後、多数モンゴルに移住し、その一部は政府高官の地位について、ヨーロッパ式の軍制、軍事技術や学校教育、行政管理上の技術知識の導入に努め、一部は仕立て屋、鍛冶屋、自動車運転手、大工、農民として活動した。かれらは、人種、言語が近いためにモンゴル社会にとけこみ、ロシア文化をもちこんだわけである。モンゴルの独立には、内モンゴルのハイシャンも寄与している。漢人も商人が進出していたが、農民の移住は内モンゴルに限られていた。

モンゴルは1915年のロシア・中国・モンゴルの三国間条約によって中国の宗主権は認めたが、自治権は承認させた。ロシア革命後ソヴェト・ロシア政府は、1919年7月25日に「カラハン宣言」によって中国人民と中国の南北両政府にたいし、不平等条約の廃棄と民族解放運動援助の意思を表示したが、その直後の8月3日に自治モンゴル政府と人民に対する特別声明を出し、イルクーツク駐在のソヴェト・ロシア外務人民

委員全権代表シュミヤツキーを介してモンゴル政府にとどけた。「ロシア人民は、モンゴルにかんする日本および中国政府とのすべての条約を廃棄する。モンゴルは自由な国である。力と金を手中に収めていたロシア人顧問、ツァーリの領事、銀行業者、金持ちをモンゴル人民は…モンゴルから放逐すべきである。国の全権力と裁判はモンゴル人民に属すべきである。外国人は何人もモンゴルの内政に干渉する権利をもたない」(田中、1971、25)。ソヴェト・ロシアの影響が強まるのを恐れたモンゴルの封建支配層は、1919年11月に中国にたいする自治を放棄した。

1917年8月、ロシア臨時政府のケレンスキーによってセミョーノフとともにザバイカリエに派遣されていた男爵で陸軍中將のウンゲルン・フォン・シュテルンベルグは、1920年に日本軍がザバイカリエから撤退するとセミョーノフ軍と分かれ、10月20日800人を率いてモンゴル国境を越え、1921年2月4日ウルガを占領し、事実上モンゴルの独裁者となり、「中央アジア国家」の理念を唱えた。

1920年6月に、独立を守ろうとしたスヘバートルやチョイバルサンらは人民党を組織するとともにソヴェト・ロシアにおもむき、21年3月キャフタで人民党第1回大会を開き、さらに人民義勇軍を結成し、18日に中国軍からマイマチェンを解放し、7月6-7日には、ソヴェト・ロシア赤軍、極東共和国軍、モンゴル人民義勇軍は共同でウンゲルンからウルガ(1924年ウランバートルに改称)を解放し、11日に人民革命政府を樹立した。ウンゲルンは、5月22日1万人の部隊でトロイツコサフスク(1727年に建設された要塞、1728年その近くにキャフタ商業集落が発展した。両者は1934年に合併されキャフタとよばれることになった)を攻撃し、7月にウ

ルガを失った後もセレンガ川沿いに戦いヴェルフネウディンスクを脅かしたが、8月に捕らえられ、9月15日に銃殺された。

この間、イルクーツク県革命委員会の指導者ミャスニコフは、1920年7月、このソヴェト・ロシア政府声明やロシア共産党綱領をモンゴル語に訳してウルガに送り、8月にはヴェルフネウディンスクでロシア共産党規約をモンゴル語に翻訳するなど、ロシア革命の理念をモンゴル語によって広めた。

モンゴルは独立し、モンゴル人民党が政権についたが、指導的な地位にはブリヤート人とカルムイク人が占めた。1924年までにモンゴル国籍をえたブリヤート人は1万6093人ともいわれる。ブリヤート人ジャムツァラノとリンチノがソヴェト・ロシアとの連絡をとった。ジャムツァラノは仏教徒であったが人民党綱領のおもな執筆で21年に内務副大臣に任命された。リンチノはソヴェト・ロシアの路線を推進し、治安の責任者として、最初の大臣であったボドとダンザンを22年と24年にそれぞれ粛清した。

#### 4. セミョーノフと日本軍の干渉

コサック1等大尉で、臨時政府によってモンゴル人、ブリヤート人による義勇軍のザバイカリエ騎兵連隊長に任命されたブリヤート人を母とするグリゴリー・ミハイロヴィチ・セミョーノフは、1917年11月19日(12月2日)、ヴェルフネウディンスク地区のベリョゾフカで反乱し町を占領しようとしたが反撃され、満州に退いた。1918年1月にサバイカリエ東部に侵攻し、ダウリアを占領したが、3月1日にラズに率いられたザバイカリエ方面軍部隊に敗れた。4月、セミョーノフ軍は鉄道沿いにふたたび満州からオノン川にいたり、チタを脅かした。そのさい、

「日本が投入した新鋭装備と日本兵の活躍」(原、237)が目立った。5月上旬から中旬にかけ、ダウリアのソヴェト軍に攻撃されて敗北し、残党は7月に満州に逃れた。

その後1918年9月チェコ軍団の反乱のなかで、セミョーノフはふたたびザバイカリエで強力となり、軍事独裁体制を樹立した。日本は、大モンゴル構想にもとづいて、ブリヤート人、内外モンゴル人による統一国家を建設しようとし、セミョーノフを支持した。セミョーノフは、1919年2月25日、チタに汎モンゴル建国会議を招集し、内・外モンゴル、ブリヤート人などからなり、首都は将来ハイラルとするが当面ダウリアにおくモンゴル国を樹立することを決めた。日本は、連合国に牽制され、朝鮮の三・一独立運動に衝撃をうけてセミョーノフへの直接援助を打ち切り、コルチャクらのオムスク政府への援助を本格化した。セミョーノフ軍は、1920年10月21日にチタを、11月20日にダウリアを失う。

1919年半ばにはロシアの国内戦は峠を越えたが、東部戦線のコルチャク軍も相次ぐ敗北によって秋にはほとんど勢力を失った。1920年4月にヴェルフネウディンスクに極東共和国がつくられ、その周辺を領域としたが、セミョーノフの敗退後首都をチタに移し、領域をバイカル湖から太平洋岸までに拡大し、ブリュヘルの指導下に人民革命軍を編成して日本軍と戦った。

このためブリヤート人は当初、西部はロシア共和国に、東部は極東共和国の一部を形成していたが、1921年4月27日、極東共和国内にブリヤート・モンゴル自治州が、22年1月9日ロシア共和国内にブリヤート・モンゴル自治州が形成された。国内戦が終わり、22年11月に極東共和国が解消されると、23年5月30日に両自治州は統合され、ヴェルフネウディンスクを首都とするブリヤート・モンゴル自治共和国となった。



## 5. 定住化・工業化と経済的変革

1916/17年から23年の国内戦期に耕地面積は34.5%減少したが、28年には復興し、23-32年の10年に2倍となった。

革命前、土地没収と移民によって、畜産は衰退し、ブリヤート人100人あたりの家畜頭数は1897年の1066頭から、1916年893頭、22年720頭へと3分の2となったが、23年以後は増加し始め、29年には、馬は136.3%へ、牛は169.60%へ、羊・山羊は272.5%となった。この間種の改良もおこなわれた。

大戦前1912年、ブリヤート人の工業企業は、ウラン・ウデを中心に食料品、製材、羊毛皮革など30で、労働者は1648人であった。革命後の国内戦によって、23/24年には企業は16、労働者数は854人となったが、27/28年にはそれぞれ20、1215人へ復興し、第一次五カ年計画期には、機械製作、煉瓦、製材、車輛修理などの部門に大規模な投資がおこなわれ、固定資本は2倍以上となった。労働者数は、23-32年に1万700人から4万2600人へ、運輸部門は1500人から6100人へ、建築部門は200人から8100人へ急伸した。ブリヤート人は19.5%となった。

商業は共和国成立とともに社会化が急速に進んだ。すなわち、1922/23年には社会化された商取引は18.6%にすぎなかったが、翌年には一挙に57.1%となり、26/27年75.3%、27/28年92.0%、32年には98.8%となった。穀物の買い付けは、29年48.46万ツェントネル（1ツェントネル=100kg）、30年59.82万、31年87.55万、32年68.63万と伸びたが、うちコルホーズからの買い付けは、30年の20%から31年69%へ急増した。畜産物の国家買い付けは食肉は1926/27年7600ツェントネルであったが32年には10万

3000ツェントネルへ伸び、皮革原料も8万7400個から25万5700個へ増加した。消費組合は、1928年10月には26.5%であったが33年1月には93%、うち都市83%、農村98%となった。

集団化・定住化では、1931年半ばに20万1900haが没収され、1万1651戸が定住化し、遊牧民の25%、半遊牧民の31%が定住化した。34年末までにコルホーズは農民の73.8%、播種の91.2%、家畜頭数の88.3%を統合した。29年から33年7月までに、馬は62.5%、牛40.0%、山羊・羊は28%減少した。これは、家畜の徴発、定住の強制による屠殺、出産率の低さ、伝染病、死亡、世話と飼料不足による。

コルホーズの耕地面積は28-32年に4100haから28万6300haへ、全耕地の4分の3となった。作物も変わり、16/17年に60.9%を占めていた春播裸麦は、32年には37.3%に減った。一方小麦は9.8%から23.4%、燕麦は13.5%から19.6%へ増加し、牧草が増大した。

土壌の質、気温の変動と少ない降水量など、自然条件には恵まれていないが、耕作方法、種子の選別、播種法、イナゴ・野ネズミの駆除がおこなわれた。トラクターも1932年末238台となり、耕地7万2200ha中5万5100haを耕した。

ブリヤート人は、1926年から39年までに、人口が23万7500人から22万4700人へ減った。これは、定住化・集団化を嫌ったブリヤート人が、それに抵抗し飢餓に陥ったためと思われる。隣のモンゴルでも、29-32年に、集団化が試みられたが、32年以後中止され、生産協同組合としてもっとも初級の牧民生産組合の形成にかえられたが、それも組織率は僅かであった。集団化はあらためて、1959年から行われたのである。

## 6. 領域の縮小と大粛清

革命後1920年代にモンゴル・ナショナリズムが強まり、1931年におこなわれたラテン文字の導入も、33年によく根付いたほどであった。

党書記エルバノフは、1933年にウクライナやベロルシアで非難された「地方民族主義」は、ブリヤートにはないと請け合い、36年1月にモスクワに招待されたが、夏までに評価が変わり、後継者イグナチェフは、「かれらは、ブリヤート・モンゴルをソ連から分離しようとして、祖国をサムライの国日本の陰惨なファシストの保護国にしようとしたのである」と非難した。

ブリヤートでは、第二次五カ年計画の重点項目であった、ウラン・ウデの機関車・車輛修理工場の建設計画を4割しか実現できず、経済的に行き詰まっていた。

1937年に領土が再編成され、イルクーツク北部のアラル、ボハン、エヒリツ・ブラガツ、オルホンの4地区がブリヤート共和国から切り離されて「ウスチ・オルダ・ブリヤート・モンゴル民族管区」となってイルクーツク州に編入され、東南のウラアン・オノンとアガの2地区が「アガ・ブリヤート・モンゴル民族管区」として、チタ州に属することになった。これによってブリヤート・モンゴル自治共和国の名称民族人口は21万5000人（43.8%）から11万6300人（21.3%）へ急減した。面積としては12%の縮小にすぎなかったが、6地方は、ブリヤートの家畜頭数の3分の1をもち、西部は播種面積の4分の1を占めていた。これは、2つの飛び地をそれぞれロシアの州に統合してブリヤート共和国を縮小し、共和国における大粛清を遂行しやすくしようとしたともいわれている。当時、日本はアジアとの連帯を唱え、おなじ仏教徒で

あることを利用して、この地域に進出を図ろうとしていた。

大粛清では、エルバノフ、ダンピロン、全議員が逮捕され、ブリヤート人をソ連から切り離して日本の支配下におこうとしていると非難され、1937年に見せしめの裁判の後、54人のブリヤート人が処刑された。エルバノフの告発は9月26日、処刑は10月12日であった。

ブリヤート人の受難は、ソ連内に限られなかった。同じ理由で、モンゴル国家の創設に尽くしたブリヤート人のジャムツァラノとリンチノも処刑されている。モンゴル国内に住む1万戸のブリヤート人の家庭では、1934年から「20歳以上のおよそすべての男たちが、十月革命を裏切った反革命分子として、かつまた日本のスパイとして逮捕された。残忍きわまりない拷問にかけられ、ありうべくもない『罪』を引き受けさせられ、命令によって幾千もの人々が銃殺されたのだった。当時、日本が東北中国いわゆる満州を侵略していたことも、私たちブリヤート人の受難とは全く無関係でなかったのである」（エルデネ「一人前の人になった私」小長谷、101）。

日本がモンゴル、中国からソ連進出を意図していたことは、39年に出版された本の次のような記述にもあらわれている。「大陸経済の建設は単に、日満支蒙のブロック経済政策によって日本の国内需給関係を整調しようということのみならず、次にきたる乾坤一擲の対蘇政策に備えて防共政治経済機構を大陸に建設せんとする積極的な意図をもつものであらねばならぬ」（平竹、2）。

## 7. ロシアのなかのブリヤート

モンゴルは1939年のノモンハン事件（ハルハ川戦争）をソ連とともに戦ったが、第二次世界

大戦末期には、3国に分かれていたモンゴル民族は、中国解放を肩を並べて戦った。戦後52-84年、モンゴルはツェデンバル書記長の下に社会主義経済への移行をおこなったが、この期間に中国も社会主義的改造をすすめ、これによって3国のモンゴル民族はすべて社会主義の下で生活するようになった。

1958年7月7日の最高会議幹部会令で、ブリヤート・モンゴル自治共和国はブリヤート自治共和国と改称されたが、ペレストロイカの時期、以前の名称と、1937年以前の領域の復活の要求があらわれた。民族意識が強まるなかで、1987年ブリヤート語が復権し、89年までに大部分の学校で教育の言語となった。歴史の再検討も始まり、『ブリヤート自治共和国の歴史』が編修され、チンギス・ハンの評価が高まった。しかしこれは、より人口の多いロシア人の利益とも競合するものであり、ブリヤート政府は、1993年に2自治管区の地位を認め、両管区との文化的・経済的関係の強化を要求するにとどめている。

1990年10月8日、ブリヤート最高会議は、自治共和国を共和国に昇格し、ブリヤート語・ロシア語を公用語とした。91年6月12日のロシアの大統領選挙でエリツィンは、アガ・ブリヤート自治管区ではルイシコフに敗れた。8月27日には、ウラン・ウデで、クーデターを支持したブリヤート指導部の辞任を要求するデモが、ブリヤート民主運動によって組織された。9月22日、ブリヤート・モンゴル人民党は、ロシア連邦憲法草案を、中央と諸共和国との新しい関係を定めることに失敗していると非難した。9月30日にはウラン・ウデで、南シベリアにおけるロシアの利益に抗議するためにザバイカリエ・ロシア連合が結成された。

ソ連解体後の1992年2月13日、ブリヤート最

高会議は、共和国のなかで最初に、ロシア連邦への参加を明確に支持した。

1992年11月18-19日、ネグデル民族統一運動は、ブリヤート・モンゴル共和国へ改称し、アガ・ブリヤート自治管区とウスチ・オルダ・ブリヤート自治管区の併合をふくむブリヤートの国家・民族創設に関するいくつかの宣言をおこなう非公式のブリヤート民族集会を召集した。しかし、93年1月13日、ブリヤート最高会議は、民族集会は非合法で、その決定は無効であると宣言した。6月、ブリヤート政府はブリヤート語を3つの領域に分割した1937年の布告を非難し、2つの自治管区を、ロシア連邦の平等のメンバーとして正式に承認した(Fondahl, 230)。

1994年2月22日、ブリヤート議会は、共和国の新憲法を承認した。3月20日のアガ・ブリヤート自治管区のドゥーマ選挙では、有権者の60%が投票したが、これは地方選挙のなかでもっとも高かった。2月採択の憲法によると、議会の定員は65人で任期4年、選挙にあたっては、地域と民族が考慮される。元首で行政権の長である大統領は公選で任期4年である。94年7月の議会選挙では、地方行政政府長官と副長官が12人、企業幹部が21人を占めた。7月19日にブリヤート人のミハイル・セミョノフが議長に選ばれた。7月1日のブリヤート大統領選挙はロシア人でブリヤート語を話すレオニード・ヴァシリエヴィチ・ボタポフが72%得票し、ブリヤート人でブリヤート語の話せない候補者アレクサンドル・イヴァノフを破って選ばれた。かれは、90年4月に共和国共産党委員会第一書記に選出されている。95年のロシア国家会議選挙では1つある小選挙区で農業議員集団の幹部が当選した。比例区では共産党が第一党である。1996年のロシア大統領選挙ではジュガノフがエリツィンを

上回った。95年7月11日、ブリヤーチアは、モスクワで権限区分条約に調印した。

ブリヤーチアには北部にエヴェンキ人の居住地があるが、政府は数多くの農村行政単位とエヴェンキ人の民族地区（バウント）を創設した。

モンゴルとの関係では、ブリヤート人は、そこをソヴェト時代に自分たちが失った口碑、歌、習俗、物質文化の保存庫とみなしている。

## 付. モンゴルの現状

モンゴルでは1990年3月、ゴムボジャビン・オチルバト人民革命党書記長が一党制を放棄し、7月に自由選挙をおこなった。その結果、人民大会議では人民革命党が勝ったが、人民小会議では野党が4割をとり連立政権となり、P・オチルバトが大統領に選ばれた。1992年新憲法によって国名が人民共和国からモンゴル国と改められ、6月の人民大会議選挙で人民革命党が圧勝し、6月に人民小会議を廃止した。93年6月の大統領直接選挙では、民族民主党・社会民主党の現職オチルバトが再選された。96年6月の総選挙でも「民主連合」が大勝利をおさめ、人民革命党は初めて下野し、エンフサイハン内閣が成立し、市場経済化を進めたが、10月の地方選挙で「民主連合」は惨敗した。97年5月18日の大統領選挙では人民革命党のバガバンディが当選し、内閣との間にねじれ現象が生まれた。98年7月エルベクドルジ内閣が総辞職した後、大統領は首相候補を拒否し続けている。

ソ連軍は1992年9月までに撤退し、93年1月ロシアと友好協力条約を調印し、中国とは94年4月に友好協力条約を結んでいる。97年10月にはツェデンバル人民革命党書記長が名誉回復し、98年1月にはチンギス・ハン記念像建設計画が支持された。12月には国連総会で「非核保有国

の地位」を承認された。

## 8. 言語と文字：ロシア化とモンゴル化

ブリヤート語は1958年までブリヤート・モンゴル語とよばれていた。

1989年ロシアのブリヤート人41万7425人中36万1369人がブリヤート語を、5万5587人がロシア語を母語としていた。

モンゴル方言は、単一の言語の分枝であったが、13-14世紀のモンゴル帝国解体後自立的なモンゴル語の形成が始まる。のちに原ブリヤート種族となるモンゴル諸遊牧民は、10-11世紀にバイカル湖周辺に移住して来た。同じころ、トルコ系のクリカンとツングース系のエヴェンキが居住していた。トルコ系は放牧に適した低地に、エヴェンキは山地のタイガに生活した。クリカンは北部か西部に、エヴェンキと若干のトルコ系種族はこの地に住み続けた。これらの種族の言語の影響のなかでブリヤート語が形成される。

13世紀から20世紀の初めまで、モンゴル語共通の古い文字が使用されていた。17世紀にブリヤート種族がロシアの支配下にはいると、ロシア・ブリヤートの2語性がうまれた。ブリヤートの僧院では仏典などの木版印刷が発展し、18-19世紀には、世俗文献も印刷された。

革命後1920年代には、モンゴル諸民族に共通の古文字が使われ、ブリヤーチアでは、多くの点でハルハ・モンゴルと共通の言語が作られた。

1923年以降、ウラン・ウデのブリヤート人人口は増加し、28人から4690人へ、都市人口中の比率は0.05%から7.90%となった。一方、経済の発展にともなう都市への人口の移動、モスクワなどへの出稼ぎや進学、自然条件や農業政策

の失敗のため、農村人口の比率は減少した。

読み書きは、初等教育がラテン文字によるブリヤート語でおこなわれるようになったため、読み書き率は1923年から1933年までにブリヤート人は15.3%から60.3%へ、ロシア人は29.4%から69.6%へ増加し、とくに女性のブリヤート人は4.2%から48.1%へと増加した。8-11歳児童の通学率は、1923/24年の26.9%から32/33年の94.2%となり、ブリヤート人のみをとった場合は17.1%から96.1%となった。

革命後の第2期には、1931年にラテン文字に、1939年にロシア文字に変えられた。ラテン文字の導入とともに、読み書き率は急速に高まり、ナムサラエフ、ドン、トゥムノフ、ツィデンダムバエフ、バトルジャバイなどの作家の作品が普及した。ブリヤート語の使用範囲が広がり、ブリヤート人の学校では母語教育が実現し、成人の間でも読み書きが普及した。1930年代末、ブリヤートの4つの方言のうちホリント方言が文語として形成された。ブリヤート人のインテリゲンツィアと科学・技術の専門家が生まれたが、1937-38年の大粛清期、この過程は中断された。古モンゴルの用語が排除され、ロシア語にとってかわられるようになった。

戦後は、ブリヤート・ロシア語化がすすんだが、1970年代初めからロシア語化が推進され、ブリヤート人だけの地方でもロシア語教育に移行した。ブリヤート語での出版は減り、新聞『ブリヤート・ウネン』は5-6000部、雑誌『バイカル』は2-3000部、ブリヤート語でのテレビ放送は週6時間、ラジオ放送は4-5時間であった。

共和国には163のブリヤート民族学校があった。大部分の学校は混合学校で、ロシア語だけの中学校もあった。ブリヤート語はブリヤート学校1-4年だけの教育用語となった。

1986年に初めて、すべての学校で母語での教育がおこなわれるようになった。出版、テレビ・ラジオでの言語状況も変わった。91-92年ブリヤート教育大学にブリヤート文献学部が設けられ、93年に2000年までのブリヤート語発展国家計画が作成された。

1992年の「ブリヤート共和国諸民族の言語について」によって、ブリヤート人がすこしでも学ぶすべての学校でブリヤート語教育は必修となった。現在ウラン・ウデの47の学校と職業技術学校、すべての地区中心地の学校でブリヤート語が教えられている。

#### 参考文献

- 小長谷有紀編『暮らしがわかるアジア読本 モンゴル』河出書房新社, 1977.
- 木村英亮「モンゴル人民革命とソヴェト・ロシア」江口朴郎編『両大戦間の国際政治とアジア・アフリカ』アジア経済研究所, 1973.
- 木村英亮「モンゴルの非資本主義的發展」『東京大学教養学部・教養学科紀要』第5号, 1974.
- コラーズ, W. 谷口 勝訳『ソヴェト極東民族誌』国際文化研究所, 1956.
- 坂本是忠「ブリヤート、ブリヤート自治共和国」『アジア歴史事典』第8巻, 平凡社, 1961.
- ソボレフ, ペ・エヌ(監修)川越史郎(監修)『十月社会主義大革命の歴史』プロGRESS, 1977.
- 田中克彦『草原と革命』晶文社, 1971.
- 田中克彦「ブリヤート」『世界民族問題事典』平凡社, 1995.
- バフルーシン, エス・ヴェ, 『スラヴ民族の東漸』外務省調査局, 1918.
- 原 暉之『シベリア出兵, 革命と干渉1917-1922』筑摩書房, 1989.

- 平竹伝三『新東亜の建設，蘇聯・支那・満州・北洋』教文堂書店，1939.
- フォーシス，ジェームス 森本和男訳『シベリア先住民の歴史，ロシアの北方アジア植民地 1581-1990』彩流社，1998.
- モンゴル科学アカデミー歴史研究所，田中克彦 監修『モンゴル史』1，2，恒文社，1988.
- 吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社，1974.
- 『世界年鑑，1998年』共同通信社，1998.
- 吉村忠三『ブリヤート蒙古の全貌』日本公論社，1935.
- Dolgikh, B. O., "Buriat", *The Modern Encyclopedia of Russia and Soviet History*, ed. By Josef L. Wieczynski, vol. 6, Academic Internationaal Press, 1978.
- Fondahl, Gail, "Siberia: assimilation and its discontents", *New States, New Politics: Building the Post-Soviet Nations*, ed. by Lan Bremmer, Cambridge Univ. Press, 1997.
- Forsyth, James, *A History of the Peoples of Siberia: Russia's North Asian Colony*, Cambridge Univ. Press, 1992.
- Krausse, Alexis, *Russia in Asia: a Record and a Study 1558-1899*, Curzon Press Ltd., London, 1973.
- Stephan, John J., *The Russian Far East: A History*, Stanford Univ. Press, 1994.
- Basaeva, K. D. i dr., *Souremennyi byt i etnokul'turnye protsessy v Buryatii*, Novosibirsk, 1984.
- Buraev, I. D., Shagdaev, L. D., "Buryatskii yazyk", *Gosudarstvennye yazyki v Rossiiskoi Federatsii*, M., 1995.
- Demidov, B. A., *Oktyabri i Natsional'nyi vopros v Sibiri*, Novosibirsk, 1983.
- Maksanov, S. A. (otv. red.), *Sotsial'no-ekonomicheskoe razvitie Buratii*. Novosibirsk, 1987.
- Mangutov, N.R., "Buryatskaya ASSR", *Sovetskaya istoricheskaya entsiklopediya*, t.2, M., 1962.
- Geografiya Rossii: Entsiklopedia*, M., 1998
- Goroda Rossii: Entsiklopedia* M., 1994.
- Narody Rossii: Entsiklopedia* M., 1994.